

平成17年（2005年）2月議会

1. 思川へのアプローチ整備調査事業

思川へのアプローチデザインアイデアコンペ入賞作品の実現性は。

2. 小山市民病院について

外来時及び入院回診時における患者のプライバシー確保について

3. （仮称）都市と農村交流センターについて

直売所の運営と商品管理について

POS システムを活用して直売所会員に対する情報提供

まず、質問に入る前に、私にとっての思川についてお話をさせていただきます。私は、小山市に生まれ、小山第一小学校、小山中学校、小山高校、そして白鷗大学を卒業いたしました。通ったそれらの学校の横には思川が流れており、思川とともに育ってまいりました。小学生のころ現在の島田橋は、JR両毛線の鉄橋に沿った木製の橋で、また観晃橋も古い石のようなコンクリートの橋で、大水が出たときは一部が流され、思水ヶ丘の友人が学校に登校できなかったことがありました。また、皆さん、城山公園から天翁院までのがけ伝いに防空ごうがたくさんあるのをご存じでしょうか。そこを探検と称して小学校から帰るときに散策したのを思い起こされます。昔、川は自然に触れることができ、自然を知る最高のステージでした。旧島田橋で魚釣り、また上流の栃木の太行寺堰で泳いだりもいたしました。もちろん、その中で自然の怖さも思い知ることができました。また、それは大人になってからも川の怖さを目の当たりにいたしました。大学生のころ、高校時代の友人たちと鬼怒川の中島橋の下でバーベキューをしていたときに、やはり近くでバーベキューをしていたグループの子供が川に流されてしまったことがありました。夏で川の水は少なかったのですが、見る見るうちに流されていってしまいました。たまたま一緒にいた私の友人が小山の消防署員で、すぐに川に飛び込み、救助して無事でしたが、流されていくスピードは速く、冷やりとさせられたのを覚えております。子供のときも大人になっても自然の怖さについては、やはり体験して初めて知るものでございます。現在川は危険と言われ、子供たちだけで川で遊ぶことはなくなってしまいました。しかし、それでは、せっかく小山が持つ市街地を流れる思川の自然に触れることなく、そして自然の怖さを体験することなく大人になったとき、災害予防もできないのが現実ではないでしょうか。このことを踏まえ、私の思川に対する思いを込めて、通告に従い質問をさせていただきます。

**1. 思川へのアプローチ整備調査事業**

まず、思川へのアプローチ整備調査事業についてお伺いいたします。去る1月22日に行

われました小山市制 50 周年記念事業の一つでありました小山のまちづくりシンポジウムの中で、思川アプローチデザインアイデアコンペが行われました。これは、観晃橋から思川へおることができるデザインコンペで、テーマは「歴史と自然とにぎわいの大空間、思川リバーステージ、いやしへのプロローグ」、少々テーマは長かったのですが、小山市民にとって思川は憩いの場として、安らぎの場として、またいやしを求めて親しまれています。このすばらしい空間と歴史的資源である祇園城跡、そして中心市街地のにぎわいの場を結びつける新たな憩いの場として思川へのアプローチデザインを求め、より一層人々が親しみを醸成できるような魅力ある思川を中心とする小山のまちづくりを進めていくという趣旨で開催されました。応募は、一般デザインの部 36 点、子供デザインの部 8 点、一般論文の部 4 点、子供作文の部 21 点の出品があり、どれもこれもアイデア性に富み、小山市民にとって母なる川である思川をテーマとし、中心市街地活性化とともに考えた作品ばかりでありました。一般デザインの部最優秀賞に選ばれました、宇都宮大学院生である市川大輔さん、上村勇樹さん、渡辺美代さん 3 名による作品をごらんください。

テーマは、「小山くるわガーデン」でございます。アイデアコンペ授賞式の中で行われた市川大輔さんによるプレゼンをもとにこの作品のご説明をさせていただきます。設計は、歴史と自然とにぎわいを正面から考える、これらが三位一体となって一つの場をなしている風景を意図するという趣旨でございます。まず初めに、歴史については計画地の北東に連なる小高い台地群、それはくるわと呼ばれ、かつての祇園城、現在の城山公園の城壁を意味いたします。くるわというのは、城を囲っている垣根、城壁という意味がございます。くるわという場の形態と特徴を現代のくるわによみがえらせるということでもあります。デザインとしては、一つ一つが独立しているが、起伏を持って全体につながる場所、そしてさまざまな凹凸、そのすべてに個性があり、もとの地形を生かしてつくられているということです。

次に、自然についてですが、今回の計画で実現されることで自然が少しでも壊れてしまわないためには、人だけでなく、多くの生き物が集まる場、人と自然が手をとる姿がここにあらわれてくれたらと思う。また、にぎわいについては、さまざまな動線が接し、時に交わるような思川へのアプローチを計画する。人々が出会い、集い、憩う場、イベントに応じたさまざまなステージが生まれる。さらに、くるわがもたらす多様さと楽しさに期待したいとのことでした。

簡単にご説明させていただきますと、円形の台地、これがくるわでございます。城山公園の城壁、もともと歴史上でいう意味があるくるわでございます。それと、こちらの円形の台地、これを関係させて思川へのアプローチデザインとしたものでございます。審査委員の講評として、この作品はデザインに魅力があり、造形、意匠的にすぐれ、思川及び観晃橋周辺の景観と調和が図られている。また、小山市の歴史に根差した配慮がなされており、奇抜なアイデアで私たち小山市民に夢や希望を与えてくれた作品であり、色彩、配色の表現も模型や画像処理など高度なテクニックを駆使した完成度の高い作品であると総評

され、最優秀賞に選ばれました。このアイデアコンペですが、過去にも小山市では数回行われており、過去において代表的な例を挙げますと城東公園のステージ城東があります。平成6年に行われた城東公園街角広場デザインコンペ、一席入選作が実現した例があります。城東公園は、皆様ご周知のとおりコンペデザインの趣旨を損なうことなく完成したものでございます。毎年地元の方々のご努力により運営されているステージ城東フェスティバルやフリーマーケット等が実施されております。このアイデアを出された方が毎年城東フェスティバルに参加されているとも聞いております。そうしたことを踏まえ、来年度の予算計画に計上されている思川へのアプローチ整備調査事業については、今回実施された思川アプローチデザインコンペ入選作品を実現化の方向で調査事業を行っていただきたいと思っております。当然河川をいじるわけですから、河川法の絡みも出てくるとは思いますが、十分に県との協議を重ねていただきたいと思っております。たくさんの応募、そして市民の思いを組んでいただき、入賞作品の趣旨を損なうことなく、多少のデフォルメは仕方ないとしても、実現に向けて進めていただきたいと思っておりますが、いかがでしょうか。

## 答弁

◎大久保市長　ただいまは、小川議員には幼いころからの思川に対するすばらしい思いを披露していただきまして、まことにありがとうございます。感動いたしました。小山市の母なる川であります思川を現代の子供たちにも自然に親しむ場として、そしてまた市民の皆様に対しても憩いの場として整備していきたいと思っておりますので、議員には今後ともご理解とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

それでは、小川議員のご質問のうち、1番目の思川へのアプローチ整備調査事業、思川へのアプローチデザイン、アイデアコンペ入賞作品の実現性についてはご答弁申し上げます。このアイデアコンペは、先ほど小川議員からも詳しくご説明がございましたが、小山市のシンボルであり、自然豊かな思川と町を一体化するため、祇園城通り、橋詰広場付近から河川敷や堤防状の散策路に直接おりられるようにする魅力あるアプローチのデザインを公募したものでございます。思川は、小山市都市景観形成基本計画の中においても小山市のシンボリック的存在であると位置づけられており、都市景観形成の推進に向けて思川と町との関連を強くするためにデザインのアイデアコンペが提言されておりました。また、現在当該箇所は城山公園から小山総合公園までの思川沿いの散策コースの拠点になってはいるものの、観覧橋付近において祇園城通りが4車線で横断できず、小山駅方向へ戻るようにして、往復約200メートルほど遠回りしなくてはならないことから、不便を来しているという市民の皆様のご要望も踏まえまして実施したものでございます。さまざまな発想に基づくアイデアや提案を広く求めるため、新聞やインターネットなどを通じ、市民の皆様を初め広く全国の皆様に募集を行った結果、市内を初め東京、神奈川、遠くは九州からも技術者の卵である学生やプロなど幅広い層の皆様からさまざまなアイデアが盛り込まれたすばらしい力作の応募をたくさんいただくことができました。応募作品につきましては、

1月22日に開催しましたまちづくりシンポジウムで展示発表し、優秀者の表彰を行いました。最優秀賞に輝いた宇都宮大学大学院生による作品は、課題地区の周辺がかつて中世の豪族、小山市の居城、祇園城の跡であることから、祇園城の城壁くるわをモチーフとしており、小山に伝わる壮大な歴史や水と緑の宝庫、思川の大自然が感じられ、そして何よりも私たちに夢と希望を与えてくれるものでした。先ほど小川議員からパネルを利用させていただきまして、詳しく説明していただいたところでございます。小山市におきましては、思川へのアプローチ整備実現化の要望も多いことから、その実現を図るべく、平成17年度に基本構想づくりの調査を開始、平成18年度に基本計画、平成19年度に実施設計、そして平成20年度に整備工事を目指していきたくと考えています。実現化に当たり、実際には当該箇所が県道を含む河川区域であるがゆえに、河川法などの制限を受けるため、河川管理者を初め関係機関のご指導やアイデアコンペの審査をしていただいた都市景観審議会のご意見をいただきながら、コンペ作品の少しでも多くのアイデアを取り入れて、事業化に向けた取り組みを行っていきたくと考えています。アプローチ整備により市民の皆様が駅から祇園城通りや思川の自然、祇園城跡周辺の歴史に触れ合いながら回遊できるようにしていきたいと考えておりますので、議員におかれましてはご理解とご協力のほどよろしく申し上げます。以上です。

箇所が県道を含む河川区域であるがゆえに、河川法などの制限を受けるため、河川管理者を初め関係機関のご指導やアイデアコンペの審査をしていただいた都市景観審議会のご意見をいただきながら、コンペ作品の少しでも多くのアイデアを取り入れて、事業化に向けた取り組みを行っていきたくと考えています。アプローチ整備により市民の皆様が駅から祇園城通りや思川の自然、祇園城跡周辺の歴史に触れ合いながら回遊できるようにしていきたいと考えておりますので、議員におかれましてはご理解とご協力のほどよろしく申し上げます。以上です。

## 2. 小山市民病院について

小山市民病院についてお伺いいたします。市民病院についてよく話を聞かされることがあります。例えば婦人科の外来診察のときです。待合室がありますが、それが狭いため中待合室も使われております。外の待合室で長い時間待たされて、中待合室に入ります。そのときに診察を受けている患者さんと先生の会話が聞こえてくるそうです。先生と患者さんの会話が聞こえてくるということは、ほかの患者さんが何の病気かというのわかりますし、自分の病気も他人に聞かれてしまっているということに嫌悪感を覚えるそうです。また、入院回診時においても同様のことが言えます。大部屋の場合、あの人は何の病気で入院している、そこまでよくわかるそうです。それでなくても今は情報を患者さん自身でも持っており、薬一つでも何の病気かわかるのが当たり前の時代になっております。薬の件はいずれにしても、外来診察時の会話を他人に聞こえることのないような対策

がとれば、自分の病状が他人に知られる心配をすることがなく、安心して診察を受けることができますし、それによってプライバシーの確保ができれば、患者さんたちにとっても安心して市民病院にかかれるのではないのでしょうか、お伺いいたします。

## 答弁

◎刈谷病院長　まず、外来の現状であります。昭和 63 年に整備いたしました院内で最も新しい建築物である南棟 1 階の整形外科、脳神経外科の外来は、待合室のスペースも広く、また診察室と中待合室の仕切りもパーティションとドアでしっかりと遮断されており、設備上問題はないものと考えます。それに対しまして整形外科及び脳神経外科を除くすべての診療科の外来がある昭和 45 年に整備した北棟 1 階にございます外来棟は古い設計で、待合室、中待合室のスペースも狭く、そのため一部でカーテンによる仕切りを余儀なくされるなどプライバシー確保の上で設備上の問題があり、それぞれの診療科で工夫をしながらのいであるというのが現状であります。この工夫にもかかわらず、議員ご指摘のとおり、診察室での話し声が中待合室で待っている者に聞こえてしまう等の投書もあり、今まで十分に対処し切れていない部分があったことは否めません。先ごろ内科の中待合室と診察室を仕切っているドアの下部のすき間の改修やアナウンス設備の改善等を進めてきたところであります。今後も施設の現状を再点検し、診察室の声が外部に漏れないよう、特に中待合室に聞こえないよう許容範囲の中でできる限りの改修を進めます。また、中待合室に案内する患者制限など、運用面での工夫も加え、外来患者のプライバシーの確保に最大限努めてまいりたいと考えております。

次に、大部屋での回診時等における入院患者のプライバシー確保につきましては、医師、看護師など最大限配慮するよう周知するとともに、患者やその家族への診断、病状及び治療方針の説明など個人のプライバシーに高く関与することについてはカンファレンス室及び面談説明用の個室を利用するよう職員に徹底しております。また、この個室には全病棟共通の面談・説明室の表示を出し、使用中か否かがわかるようドアに表示するシステムに改めております。今後とも職員への意識徹底、設備の改修及び運用面の工夫により患者のプライバシーの確保に努めてまいりたいと考えておりますので、議員にはご理解とご指導を賜りますようお願い申し上げます。以上です。

### 3. (仮称) 都市と農村交流センターについて

(仮称) 都市と農村交流センターの直売所運営と商品管理についてお伺いいたします。平成 16 年第 3 回定例会において、インターネット上の仮想商店街について提案させていただきましたが、そのとき、全国へ小山ブランドの発信が目的でございました。さらに今回、(仮称) 都市と農村交流センターに対する提案第 2 弾として POS システムを活用した直

売所会員に対する情報提供システムを提案させていただきたいと思います。

さて、(仮称)都市と農村交流センターにおいて、直売所が占める割合は非常に高いものとなり得ると思います。特に直売所に出荷する生産者、いわゆる直売所会員でございますが、直売所の命運を握っていると言っても過言ではないと考えます。

そこで、直売所会員の方々にスムーズな出荷及び追加出荷をしていただくためにPOSシステムを活用して、直売所会員に情報提供はできないでしょうか。直売所会員が自分の出している商品の売り上げなど商品管理を携帯電話のメールやiモード、またパソコンでリアルタイムに把握することができれば、電話で確認したり、直売所まで行くこともなく、追加出荷の数量の確認等ができたりいたします。例えば島根県奥出雲産直振興推進協議会で行っている直売所では、POSシステムを利用して2時間ごとに自分の出荷した商品の売れ行き、商品ごとの売れ行きがわかるようになっており、あすの出荷品目の選定や追加出荷の数量などの予測に役立っているそうです。(仮称)都市と農村交流センターでは、2時間ごととかではなく、POSシステムと連動してリアルタイムで携帯電話のメールやiモードによる情報を見られるようにすれば、田んぼや畑にいて、その情報を確認して畑から直接追加出荷に行けます。もちろん、昨日の答弁にもございましたが、農業を営んでいる方々の高齢化の問題があり、携帯電話が使えないのではないかというお話もあると思います。ただ、直売所会員で、これからの農業を担っていく次世代、特に認定農業者の方々、JA青年部の方々であれば、このようなシステムを上手に活用できるのではないのでしょうか。一昨日、角田議員の質問の中で直売所会員は現在、穂積地区、中地区で76名、他地区で99名との答弁がございました。将来的には小山ブランドの発信を考えるときに、中、穂積地区以外の他地区の直売所会員の増加が都市と農村交流センターの経営に多大な影響を及ぼすことは紛れもない事実でございます。他地区の方が一々直売所まで在庫の確認をしに行くのではなく、携帯電話というツールを用いて情報のやりとりをするシステム化ができれば、直売所の品ぞろえも多様化し、都市と農村交流センターの集客効果も上がるのではないのでしょうか、お伺いいたします。

## 答弁

### ◎ 青木経済部長

(仮称)都市と農村交流センターは、議員ご承知のとおり小山ブランドの創生と発信を基本コンセプトとしまして、新鮮で安全な地域農産物の供給や活用などを通して地産地消の推進、農業の振興及び地域の活性化等を図る総合拠点施設として整備を進めております。このセンターの中核となる農産物直売所は、消費者ニーズに的確に対応した商品を提供することはもちろんであります。地域の産品を地域の出荷者が支える施設として、地域の人々に愛され、親しまれ、信頼される直売所づくりをすることが重要と考えております。小川議員におかれましては、前回のインターネットショッピングモールの活用にご提案に対し、深く感謝申し上げます。本施設につきましては、商品販売システムとしてPO

Sシステムを導入することとしております。議員のお話のとおりPOSとはポイントオブセールの略称で、販売時点でデータを取り込む仕組みのことであり、スーパーマーケットやコンビニエンスストアで利用されております。出荷者の顔が見える産地直売、レジの省力化、売り上げの管理、出荷者への的確な代金決済及び売り上げ情報の適切な把握と提供など活用範囲が広く、農業振興にも有効であることからPOSシステムを導入するものがあります。そのため、直売施設にPOSレジスター3台、物産施設に2台、農村レストランに1台それぞれ配置し、事務所には集計用パソコンとプリンターを1台ずつ、直売施設の倉庫にラベル発行用のパソコンとプリンターを2台ずつ置く予定であります。POSシステムの特徴として、POSレジスターを通った商品がパソコンにより集計されるため、生産者ごとの正確、迅速な精算事務ができ、また生産者別、品目別、時間帯別の中継が可能となるため、日報、月報等の作成により売れ筋商品の把握がいち早くでき、出荷や価格等の販売戦略立案の基礎データとして活用できることが挙げられます。さらに、これらを使って議員ご提案の売り上げ情報をリアルタイムで携帯電話に発信することやファクスでの配信、音声による対応が可能と考えられます。今後出荷者に対して、より詳細な情報を的確に送るばかりでなく、出荷者からの情報をいち早くつかむため、効率的なシステムを検討してまいりたいと考えております。将来はPOSとインターネットを組み合わせることにより、消費者と生産者、そして直売所にそれぞれ有益な情報が交換でき、消費者の購買意欲を高めるとともに、生産者の生産意欲向上と販売の効率化につながるものと思いますので、進歩する技術革新や社会情勢の変化に対応した運営に努めていきたいと考えております。今後とも（仮称）都市と農村交流センターの整備につきましてはご支援、ご協力をお願いいたします。以上であります。